

いのちの水

二〇一七年

六月号

六七六号

あなたは多くの災いと苦しみをわたしに思い知らされたが、再び命を得させてくださる。深い淵から再び引き上げて下さる。(詩篇71の20より)

の牧場に、憩いのみぎわに伴い、
魂を生き返らせてくださる。
(詩篇23の1〜3より)

目次

・ 命の満ちている世界	1
・ 恐れるな	1
・ 万物を支えるキリスト	3
・ 遣わされた者の使命	4
・ 苦難のただ中での祈りと救い	6
・ 人は死後どうなるのか	9
・ 編集だより	15
・ お知らせ 7月の北海道、東北、中部地方での集会	



命が満ちている世界

5月から6月にかけての山野は、一面の緑、緑…である。

無数の木々、野草たちの一つ一つの葉のなかでは、おびただしい化学反応が行なわれ、大工場でも到底できないような複雑極まりない物質が日夜生み出されている。

土のなかから、初々しい緑の新芽を出してくるさまざまの草、樹木の新芽、そこからぐんぐんと成長していく茎や葉、花等々、すべて葉において生産されている。

葉は静かなる命の大工場なのである。

そして、そうした植物たちに耳を傾けると、それらが、みないのち、いのち、いのち！

と喜びの叫びをあげているのを聞く思いだ。

他方、この世は、至るところで苦しみや苦しみがああり、死の闇はすべての人に迫っている。

しかし、そのようなただなかで、聖書は全体として、命、命、とわたしたちに語り続けている。

…園の中央には、命の木があつた。(創世記2章9)

…御言葉を愛し、昼も夜も心に抱き続ける人は、流れのほとりに植えられた木のようにだ。葉もしおれず、時がくれば実を結ぶ。(詩篇1の2〜3)

…主はわが牧者。主は私を緑

…これらのことが書かれたのは、イエスを神の子と信じて、命を受けるためである。
(ヨハネ20の31より)

主よ、あなたのその永遠の命をこの世界に、人々に与えてください。

恐れるな

人間は常に何かを恐れている。子供から大人、死の近い病人、また貧しい人も金持ちも、そして大きな権力を持つ国家元首のような人たちも。

子供のときなら、友だちにいじめられるのではないか、目的の学校、会社に入れるのか、勉強がついていけるのか、あるいは、大人になっても、自分が誰かから悪く言われるの

でないか、病氣を持っているときには、もっと重くなつてさらなる苦しに向うのでないか、また、家族間の不和があれば、これからどうなるのかこれから老年になつてどうなるのか、老年になつて孤独や死が近くなるとどうなるのだろうか―等々。

そして、社会的地位が高くなるほど、ひと言の発言の際にも恐れつつ言わねばならなくなる。たちまち日本中、あるいは世界を駆けめぐらからである。

そのうえに、地震や津波などの自然災害、交通事故、温暖化やさまざまな環境汚染、人工知能や遺伝子操作など科学技術の発展によって何が起るのかへの恐れ、そして核武装する国の増大、原発の事故など、個人的な小さなことから、世界全体の状況やはるかな未来に至るまで、何らかの恐れはつきまとう。

こうしたありとあらゆる恐れに対処する道など、だれも考

えつくことはできない。

それは、こうした人間のかかわることは、何が起るのか予測も着かないからである。

自分は何も恐れることなどない、と言うような人こそ、他者から見下されたり、自分の罪、失敗のゆえに深刻な事態が生じたとか、さき程あげたようなことが生じるとき、たちまち人間への不安、恐れが生まれるであろう。

このように人間はいかなる状況にあつても、裕福な人であっても健康そのものであつても、内なる秘かな恐れを持つている。

そうした恐れがある限り、深い喜び、真実さ、清い心等々は生まれぬ。

それゆえに、聖書はその最初から、「恐れるな!」という語りかけが繰り返して記されているのである。

： わたしは主、あなたの神。あなたの右の手を固く取つて言う、恐れるな、わたしはあ

なたを助ける、と。(イザヤ書 41の13)

家族や親族、あるいは医者などもどうすることもできないそれぞれの人に生じる恐れ、それはここにある預言者の言葉のように、神が私たちの右手をしつかり握つて、「恐れるな!」と言つてくださるのを聞き取るときに、初めて本当の意味で恐れないようになる。昔の厳しい迫害の時代、拷問を受け、とりかえしのつかない状態になることもあつたり、ついには殺されることになるうとも、それでも恐れずに、キリスト者であると言いつづけた人たち。

それは、彼らの魂の深いところに、この御声―恐れるな。私はあなたを助けるのだ!を聞き取ったからであつたらう。それとともに聖霊が与えられ、死をも越える力となつたのである。

： 心おののく人々に言え。「雄々しくあれ、恐れるな。」

見よ、あなたたちの神を。

敵を打ち、悪に報いる神が来られる。神は来て、あなたたちを救われる。(イザヤ書 35の4)

人間にとつての最大問題は、悪の力がどこまでも人間に入り込んでくるということである。子供のときから、大人、死の近い人、また学問や教養の有無にかかわらず、悪の力はどのようなところにも入つていく。地位や能力が高くとも、また人生経験を多く重ねてもなお、悪の力が入り込むのを防ぐことはできない。

自分中心、愛のなさ、正義にむかつて踏み出すことのできない―等々はみな悪の力が私たちのうちに入りこんでいるからである。

それを聖書においては、罪と言っている。

しかし、そうした悪の力(罪の力)を打ち滅ぼし、私たちを救つてくださるときが来る。それゆえに、恐れるな!と

力強く私たちに語りかけてくださっている。

最終的には、キリストの再臨ということによって、最終的に悪が滅ぼされ、あなた方(信じる者)を救う―神を信じるものたちの最終的な救いが完成される。

：ヤコブよ、あなたを創造された主は、イスラエルよ、あなたを造られた主は今、こう言われる。

恐れるな、わたしはあなたを贖う。あなたはわたしのもの。わたしはあなたの名を呼ぶ。(イザヤ書43の1)

この箇所で、ヤコブとかイスラエルと言われているのは、現代のイスラエル国家を指しているのかもしれない。イスラエルとは、アブラハムの孫であるヤコブの別名であり、ここでは、神に招かれ、神に選ばれた民(神の民)を意味している。

それゆえに、現代の私たちに

おいては、神(キリスト)を信じる人々として受けとることができる。

私たちを創造してくださった神は、私たちを贖ってくださる。私たちは弱く醜い―それにもかかわらず、その罪を赦し、私たちをその罪の力から買い戻してください。信じる者たちは、神のものとされ、神は、私たちにつねに語りかけてくださる。そこに、永遠に失われることなき深い関わりが与えられる。

「恐れるな」という表現は、新旧約聖書で80回以上もあらわれるほど、このはげましの言葉は、繰り返し神から私たちに投げかけられていると言える。

そしてこの神からの励ましを、積極的な表現に言い換えるとき、それは、つぎのような表現になる。

わが愛に居れ!

(ヨハネ福音書15の9)

キリストの愛のうちにとどま

るとき、私たちの内から自然と恐れは消えていくからである。

万物を支えるキリスト

キリストがいかなる御方であるかは、通常の偉人伝などからは到底わからない。

聖書は、そのことについて最も深く記している。その愛や真実、力、清い本質等々、福音書には随所にそのことが記されている。

そして、キリストの絶大な存在たることを、宇宙的な広大さを含めて記しているのが、ヨハネ福音書である。

：初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であつた。

この言は、初めに神と共にあった。

万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったもの何一つなかった。

言の内に命があった。命は人

間を照らす光であった。(ヨハネ福音書1の1〜4)

ヨハネ福音書新約聖書におさめられた4つの福音書のうち、最後に書かれた福音書であり、どの福音書にも書かれていないことをとくに深く記している。その表現も内容も、ほかの三つの福音書とはかなり異なる。

その深い祈りと聖霊に導かれて記されている福音書の最初におかれたこの内容は、それだけに特に重要だと神から啓示されたのがうかがえる。

ここで「言」と訳された原語は ロゴス であり、ギリシャ語では、理性、言葉、法則、原理等々多くの意味を持っている。すでにギリシャの哲学者のヘラクレイトスは、ロゴスが万物の生成を支配する永遠の法であるとしている。

ヨハネ福音書の最初のロゴスがキリストである、というのは、こうしたギリシャ哲学で言われていたロゴスが、実

はキリストであるーと言おう
としているのがうかがえる。

まだ本当の神を知らなかったギリシャの哲学者たちが探求して、ロゴスこそは、宇宙を整えているとしたが、キリストはそうしたロゴス論議の内容もすべて持つている存在であると言おうとしている。

そして、旧約聖書の最初から、全世界も創造されたことから、神の言の絶大な力をも有する御方ということで、キリストのことをロゴス、すなわち、神の言葉そのものでもあるといおうとしているのである。

：御子（キリスト）は、神の栄光の反映であり、神の本質の完全な現れであって、万物を御自分の力ある言葉によって支えておられるが、人々の罪を清められた後、天の高い所におられる大いなる方の右の座に着かれた。（ヘブル書1の3）

キリスト者もふつうは、万物を創造し、いまも支えているのは、神だと信じている。

しかし、ヘブル書やヨハネ福音書、パウロ書簡（コロサイの信徒への手紙）などにおいては、キリストも神と一つであるゆえに、天地創造をもされと記され、ヘブル書などでは、現在もキリストがこの世界を支えていると言われている。

：天地にあるもの、見えるものも見えないものも、：万物は御子によって造られた。万物は御子により、御子のために造られた。

御子はすべてのものより先におられ、すべてのものは、御子によって支えられている。（コロサイ書1の15、17）

それほど、キリストという存在は、大いなる存在であったのがわかる。そうした神に等しき存在であるというのは思索や知識の結果ではなく、

聖霊の導きによって示されたのである。

このように絶大なる存在だからこそ、私たちはキリストに全面的に信頼していきることができる。

遣わされた者たちの使命ー漁師のように集める

主イエスが多くの人たちのなかから、特に12人を選んだ。そのうちには、漁師が4人ほども含まれていた。

現在では、古代よりはるかに多くの職業があるが、それにしても当時もいろいろな職業があつたと思われるのに、とくに漁師を多く選んだことが意外に思える。

それは、主イエスご自身が言われたように、「人間をとる漁師にしよう」（マタイ4の19）

ということと関係がある。人間をとるーなどという表現は、現代の私たちは何となく違和感がある。

しかし、イエスはこの表現に深い霊的な意味を込められたのである。海などに広くちらばって泳いでいる魚を網でとる、漁師のもとに集める。

そのように、迷える羊のように、ばらばらに生きている人間を集めて、キリストのもとに連れて行く、そして一つのからだとする。

そして、罪からの救いのために来られたイエスを指し示し、特定の王とか有名人、思想家等々でなく、地上に現れた御方で唯一完全な愛と力を持たれていたキリストのもとに集めるといふ重要なはたらきを含ませている。

過去二千年という長い間、キリストからの導きを受けてこの世につかわされた人たち（*）は、みなキリストのもとに集めようとしてきたし、事実、無数の人たちが世界中で、キリストのもとに、さまざまの遣わされた人たちによってキリストの十字架のもとへと集められてきたのである。

(*)使徒と訳されているが、これも日本語訳以前に成立した中国語訳聖書でこの訳語が採用されたのをそのまま日本語訳でも用いている。この

の原語は、アポストロスであり、アポストローとは、遣わす、というごく普通の言葉である。アポは、「離れて」を意味する接頭語、ステローとは、「置く」、それゆえアポストローは、離れたところに置く、派遣する、送り出すというような意味で、これも物を送る、家畜や人を送るなど、ごく普通のことを用いる。それゆえ、その名詞形であるアポストロスは、送り出された者という意味で、12使徒以外に、各地に活けるキリストにうながされて福音を伝えた人たちにも用いられる。(ローマ16の7)

地上におられたときのイエスは、異邦人やサマリア人のところには行くな、失われたユダヤ人のところに行けーと命じられた。そしてご自身も、カナン(フェニキア)の女に對して「私はイスラエルの失われた羊のところにしかな遣わされていない。」(マタイ15の24)と言われた。

しかし、復活されたキリスト

(聖霊となられたキリスト)は、全世界に宣べ伝えるようにと言われた。

：主は言われた。「行け。あの者(パウロ)は、異邦人や王たち、またイスラエルの子らにわたしの名を伝えるために、わたしが選んだ器である。(使徒9の15)

：主は言われた。『行け。わたしがあなたを遠く異邦人のために遣わすのだ。』(同22の21)

このように、パウロには、はっきりと異邦人への伝道が中心的使命であることが記されている。

このように、同じキリストであつても、生前のキリストと、聖霊となったキリストとは言われることにおいて、表面的には異なると見える場合がある。

キリストとは、地上にて30

年余り生活されていたときのキリストと、十字架での処刑後に復活したキリストがある。霊的なキリストとなられたとき、神と同じとなり、もはや喉が渇くこともなく、口から入る食物も不要となり、瞬時にどこにでも行くことができ、すべてを見ることができ、神と同じく万物を支える御方でもある。

イエスは、ユダヤ人のなかの失われた羊に對して遣わされていると言われた。失われた羊とは何か。

イエスが言われたのは、とくに重い病氣、しかも人々から見放され、差別され、絶望的状态にあるハンセン病(らい病)のような人たち、また目が見えないゆえに、まったく無能だと見なされ、路傍で乞食をすることしかできない、という文字通りの暗黒に住む人たち、耳が聞こえず言葉も出せないゆえに、人間の顔をした動物のようにみなされて、

単純な肉体労働だけにこき使われる人たち、貧しく差別されたひとたち：等々の最も暗く悲しみや苦しみに満ちた生活を送り、ただ何とか生きていくだけだーといったような人たちを特別に対象とされていた。

それは、イエスがどのような人たちのところに出かけられたかを見るとわかることである。

他方、そうした現実の生活で生きることの困難に日々さらされている人たちー貧しく、悲しみや食物すら満足に得られない人たちだけに、より霊的に見るときには、人間はすべて失われた羊である。

主イエスは、「大勢の群衆が、飼うもののない羊のようであるので、深く憐れんだ」(マルコ6の34)と記されているように、本来人間はすべて飼う者のない、失われた羊なのであり、そうした人間全体に深い憐れみを持つておられた。

人間がみな失われた存在であることは、すでに次のように詩篇でも二つの詩で繰り返し言われ、パウロもロマ書のかで、人間の救いに関しての啓示を述べる出発点として人間の深い罪を指摘するために引用している。人間はそのような失われた羊の状態であるからこそ、そこからの救いが必要なのである。

：だれもかれも背き去った。皆ともに、汚れている。

善を行う者はいない。ひとりもない。(詩編 14の3、53の4)

このように、深い心の奥まで見る能力があるなら、人間は神の完全な正義や愛などから限りなく遠いところにあるのが示される。

だからこそ、私たちは救われる必要がある、そのために、まず12弟子たちを選び、キリストのもとに集めることを仕事とするに至ったのであった。

苦難のただなかでの祈りと救い― 詩篇55編

神よ、わたしの祈りに耳を向けてください。

嘆き求めるわたしから隠れな

いでください。

わたしに耳を傾け、答えてください。

わたしは悩みの中にあつてうろたえています。わたしは不安です。

敵が声をあげ、神に逆らう者が迫ります。(1〜4節)

彼らはわたしに災いをふりかからせようとし

憤って襲いかかります。

胸の中で心はもだえわたしは死の恐怖に襲われています。：

「鳩の翼がわたしにあれば飛び去って、宿を求め

はるかに遠く逃れて 荒れ野で夜を過ごすことができるのに。

烈しい風と嵐を避け 急いで身を隠すことができるのに。」

(7〜9)

主よ、彼らを絶やしてください。彼らの舌は分裂を引き起こしています。(10)：

わたしを嘲る者が敵であればそれに耐えましょう。わたしを憎む者が尊大にふるまうのであれば 彼を避けて隠れましょう。

だが、それはお前なのだ。わたしと同じ人間、わたしの友、知り合った仲。

楽しく、親しく交わり 神殿の群衆の中を共に行き来したものだ。(14〜15)

この詩は、死の恐怖に襲われているというほど、敵対する人が迫ってきており、嘆きと苦しみのただなかに置かれている。そのような耐えがたい状況にあつて、助けをも求める祈りを聞いてくださいーと全身の力をこめて祈る。そしてそこに、主の助けが与えら

れ、死の苦しみであつてもその重荷を主に委ねることができると恵みをじっさいに体験する。

この詩の作者ーダビデとされているーに敵対する人は何者かというと、14、15節にあるように、以前は親しく交わった友であつた。

同じパンを共にするという言い方があるが、ここでは、神殿の群衆の中を共に行き来したとあるように、神を礼拝するために共に神殿にも行つていた親しい間柄であつた。かつては親しかつた人が、ここまでも変わる、裏切りがあつたというわけである。このような状況に対して、この詩の作者は神に叫んで助けを求めている。

仲間だった人が敵になるということは、日本でも古代からしばしば生じたこととして伝えられている。大河ドラマにもそうした出来事がみられる。たとえ肉親であつても、激しい敵になるということがあつ

た。しかし、これは特定の時代に限ったことではない。

現代の私たちにもこのようなことは起こり得る。そうしたときに動揺したり、憎しみに燃えたりすることのないように、人間は突然に変わってしまふというのを、この詩を通して知っておくことができる。信仰の世界でもそうで、神やキリストを信じていると言っていた人が、イエスに対して裏切り行為をするということが実際にある。かつてキリシタンの中でも、相当なキリスト教の迫害にもかかわらず、信仰を守った人が、とらえられて牢獄の中で全く変わってしまった、今度はキリスト教を攻撃するよう、幕府の指示で、信仰を持つている人がどこにいたかなどを密告したり、手先になってキリスト教迫害を手引きするようになった人も実際にいる。

詩篇の中にも同様なことが言われている。

：わたしの信頼していた仲間
わたしのパンを食べる者が威
張って
わたしを足げにする (詩篇41
編)

このように、人間は、考えられないような豹変ぶりを示すときがある。詩篇はしばしば預言になっている。詩篇は、人間の苦しみや叫びが詩で表現されているのに、なぜ神の言葉と言えるのか。

それは人間を通して、神が未来に起こそうとしていることや、永遠の真理を告げているからである。このように人間はどんなに親しくても考えられないくらい変貌することがあるからこそ、人間でなく神に頼れということ、この詩を通して預言し、また警告している。

人間のつくった詩でありながら、それは神によって動かされて記した内容であり、永遠的な真理がある。それゆえに神の言葉と言うことができる

のである。

この親しい仲間の裏切りということ―これがとくに重要な問題となったのが、新約聖書におけるキリストの例である。「わたしのパンを食べている者が、わたしに逆らった。」(ヨハネ十三・18)

この言葉は、詩篇の41編から引用されていて、詩篇の言葉が、預言にもなっているのがわかる。

「鳩の翼がわたしにあれば
飛び去って、宿を求め
はるかに遠く逃れて 荒れ野
で夜を過ごすことができるの
に。(7〜8節)

烈しい風と嵐を避け 急いで
身を隠すことができるのに。」

翼があつたらこの世の中から
飛び去っていききたいと思っ
たことがある人も多いだろう。

旧約聖書にあらわれる重要な人物、エリヤは力ある預言者で神に支えられていた人で

あるが、そんな彼にも大きな動揺が生じた。王妃の悪魔のような、激しい敵意によって遠いベエル・シェバという砂漠地帯にあるオアシスにまで、逃げていった。灼熱の暑さと水もないところに入れば、確実に死ぬ。そしてもう死にたいと言った。

このように、エリヤのような信仰の厚い人、神に用いられた人でも、時として非常な動揺と恐れに襲われることがある。

この詩の作者は、大いなる苦しみや動揺のなか、何とかして踏ん張ろうと祈るわけだが、この祈りが旧約聖書の状況をよく表している。

10節にあるように、「彼らを絶やしてください。」さらに最後にも、「滅びの穴に追いつ落としてください。」と激しい言葉も出されている。

今から数千年も昔のことであり、神を信じて歩もうとしている自分を理由なく攻撃し、苦しめ、裏切りを働くような

ものは滅ぼしてくださいーと
いうのは自然な感情であつた
だろう。

しかし、敵に対する心のあり方―この点が新約聖書で大きく変わったところである。

「隣人を愛し、敵を憎めと言われてきたが、わたしはこう言う。敵を愛し、迫害する者のために祈れ。」
(マタイ五・43)

キリスト教の本當の力は、敵對する者でも愛して、心からその人が良くなることのできるように祈ることができるようになつて導かれるといふことである。そしてそのように求める者には、そのための力も与えられる。

キリスト者が惡に勝利してきたのはこうした神の愛の力によるのであつて武力によつてではない。

武力や権力、脅迫、テロリズムなどの力によつては、い

かにしても愛の力は打ち壊すことができない。武力は、それよりもさらに勝る武力があれば、簡単に打ち壊すことができる。

しかしイエスが言われた思
い、敵のために祈るほどの強
い神の心を与えられたら、ど
うしてもそのような心を滅ぼ
すことができない。ある意味
で一番強力なものを、憎しみ
よりもはるかに強いものを与
えてくださった。憎しみは非
常に強そうに思ふかもしれない
が、ある意味非常にもろく
その人自身を蝕んでいく。

∴わたしは神を呼ぶ。

主はわたしを救ってくださいさる
夕べも朝も、そして昼も、わ
たしは悩んで呻く。

神はわたしの声を聞いてくださる。
(17〜18節)

闘いを挑む多くの者のただ中から

わたしの魂を贖い出し、
平和に守ってください。

神はわたしの声を聞き、彼らを低くされる。

神はいにしえからいまし
変わることはない。

その神を畏れることなく

彼らは自分の仲間に手を下し
契約を汚す。…

あなたの重荷を主にゆだねよ

主はあなたを支えてくださる。

主は従う者を支え

とこしえに動揺しないように
計らってくださる。：（19
（23）

夜も朝も昼も神に叫ぶ。その

中から確かに聞いてくださった。で、贖いだしてくださった。

悪意、敵意、攻撃からどうしても出られないけれど、神が

そこから贖いだしてくださる
死の恐怖の中でも、確かに必

死に叫ぶ声を聞いてくださる
このような経験をこの詩の作

者は与えられた。

信仰を持たない場合は、と

にかく逃げたいという気持ちから、酒や薬に頼ったり、自ら命を絶つこともある。そして敵を憎む。

しかし一番良い道というのは神に向つて叫ぶこと、神を呼ぶことである。それは祈りである。

この詩の中にはこの三つの道（逃げる、憎む、神に祈る）が書かれている。クリスチャンでもうっかりしたら、二つ目の道―憎しみや赦さない―という心に留まってしまい、あんなに悪い人どうにかしてくださいと、人間的な感情になることもある。古い人間が残っているほど、このような感情が出てくる。

三つ目は、神に祈る道である。敵の力のただなかに置かれていても、敵の牙や毒が刺さらないで、攻撃にさらされるただ中から引き出してくださり、神の愛のうちにお願いただける。

そうすると敵対するものの

ただ中でいるにもかかわらず、憎しみが生まれず、その中に主の平安を与えてくださる。ことは本当に大きな恵である。それがなければ、相手をどうにかしてください、滅ぼしてくださいと、憎しみや攻撃心、敵対心がでてくる。これに似たことが詩篇23篇にも記されている。

：私の敵を前にしても、あなたは私に食卓を整えてくださる。

私の頭に香油を注ぎ

私の杯をあふれさせてくださる。(詩篇23の5)

敵対する者を前にしていても、なお、神は、霊的な食物―すなわち力や平安を注ぎ、霊の賜物をあふれるほどに与えてくださる、というのである。

これは実に、奥深い霊的体験であり、またいかなる厳しい状況にあってもなお、神は私たちにその厳しい状況に呑

み込まれてしまわない力を与えてくださり、しかも魂に喜びと満ち足りた平安を与えてくださる。

これは、人間が導かれうるもつとも高い状態を指し示す内容となっている。

このような境地は、使徒パウロが言う、「いつも喜べ、常に感謝せよ、すべてのことについて祈れ」という言葉の指し示すところと共通したものである。

言うことや外面的なことは穏やかに見えても、心には剣を持つているということがある。人間は本質的にこのようなどころがあり、それが罪である。怒りや心が不安定など、ふとしたときに目には見えな

い剣が抜かれることがある。こうした人間のうちに内在する罪の力、闇の力に勝利し、これらのことを超えて、この作者は深い平安を得るという経験を与えられた。

そこから、神への深い信頼

こそが、こうした境地に導かれるために不可欠なのがわかる。

それゆえに他者に対して「あなたの重荷を主にゆだねよ」と、語りかけることができる。これは頭で考えたり、他人からの受け売りなどではなく、みずからの主と結びついてなされた経験を通して言っている。

朝も昼も夜も、神に信頼して、この重荷をどうか軽くしてくださいと主にゆだねるならば、必ず支えてくださる。

：すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのものになる。ききなさい。

あなたがたを休ませてあげよう。(マタイ11の28)

このキリストの言葉―これが広く知られる言葉となったのは、この御言葉が確かな事実であることが無数の人々の経験するところとなってきた

からである。

どこにも持っていないような心の重荷、それを委ねる唯一の場所がある。それが、キリストのもとである。

人が死んだ後、どうなるのか

だれもが必ず向っているものとは何か。

それは、「死」ということである。死んだらいわば眠った状態となつて、終わりのラッパが響いたときに、復活するという箇所がある。(Iコリント15の51〜52)

この箇所をとくに重んじる人は、死んだらそのまま何も反応もない状態となつて土の中で眠っているというようなことを言う人もいるが、土のなかにそのまま放置しておけば、次第に風化して長い時間ののちには、跡形もなくなくなつ

てしまう。それは、人間なら体重の6割前後を構成している水分は、小さな昆虫や土中生物に食べられたりしてそれらのなかに取り込まれ、また大氣中に蒸発、あるいは土のなかにしみ込む。

またタンパク質や脂質などは、土中の生物、細菌類によって食べられ、気体となって空中に飛散し、あるいは、別の生物の体を構成する材料となる。

骨などもその成分は、雨水に含まれる炭酸や、土中にあるさまざまな化学物質と反応して土中に溶け込み、消え失せていく。

無数の人間が、過去に死んで骨も埋められたが、ほとんどすべてそのような過去の人間の骨などは見つからないのはこうした理由による。特別な乾燥したところとか雨水の混入などがないような容器に入っていたような稀な場合にかなり古い時代の骨などが見いだされたりするがそれは特別な

例にすぎない。

このように、死んで土中に埋められたなら、長い年月のうちには、人間の体を構成していた成分は、大氣や大地、あるいは川や海などのなかに拡散し、あるいは、動植物のなかに取り込まれていくのである。

そして死体そのものは、全く跡形もなく消えてしまうのであつて、土のなかに眠っているなどということではない。

死者の体はそのように地上に拡散していくのであるが、それがすべてなのか。もし死者の魂や霊というものが死んだら完全になくなるのであれば、死者は、物質的にも、霊的にも消滅するということになる。一般的に死んだら、無になつてしまうということはこうしたことから来ている。

しかし、無になるのではなく、何らかの目に見えない存在として存在し、人間にかかわってくる―というのは、おそら

くたいていの民族が古代から信じていたことである。

幽霊とか亡霊等々はそうしたものである。恨みや怒り、悲しみをもつて死んだ人―災害や事故、殺害などされた人はとくに、死んでも消えてしまったのでなく、何らかの目に見えない存在―怨霊（おんりょう）、あるいは幽霊のようなものとなって生きているものにたたりをもたらすと信じられていた。そのような死者の霊を慰め、またその怒りや乱暴狼藉を抑えるために、鎮魂―怨みを持った霊（怨霊）を鎮める―ことが行なわれてきた。体は死んでも、魂（霊）は、残る、というのは、このような意味で、ギリシャ哲学に固有のことではなく、世界のたいていの国々で、これに類することが信じられてきた。

人間が死んだら、キリストの再臨まで「眠った状態」であり、再臨によって初めて復活

すると言われることがあるが、すでに述べたように、眠っているなどというのは、死んで無になっているということを書き換えただけである。

空気中や土あるいは、川や海等々の中に分子やイオンなどとなり、拡散していったものを、死者が眠っているなどということはありえない。そうした科学的事実を知らなかった古代の人たちが、死を婉曲に表現するために「眠っている」と言っていたのである。

そうした無に等しいどこにも存在していなかったものが、キリストの再臨のとき、最後のラッパとともに、よみがえる―というように言われることがある。

この点に関してキリスト教ではどうか。生きている人が死者の供養をしなければ、災厄が起こるなどという考え方は全くない。

旧約聖書の世界では、人が死んだら、シェオール（ヘブル

語」といわれる暗い世界に行く。とみなされていた。しかし、一部の預言書(エゼキエル書、ダニエル書)や詩篇、詩的著述(ヨブ記)などには、死者からの復活ということが記されるようになっていく。(※)

(*) 旧約聖書では、次のような箇所で復活に関すること記されている。

①主よ、あなたはわたしの魂を陰府からひきあげ、墓に下る者のうちから、わたしを生き返らせてくださいました。(詩篇30の3)

②あなたはわたしを陰府に捨ておかれず、あなたの聖者に墓を見させられないからである。(詩篇16の10)

③こうして人にその悪しきわざを離れさせ、高ぶりを人から除き、その魂を守って、墓に至らせず、その命を守って、つるぎに滅びないようにされ

る。(ヨブ記33の17〜18)

④あなたの死者は生き、彼らのなきがらは起きる。ちりに伏す者よ、さめて喜びうたえ。あなたの露は光の露であって、それを亡霊の国の上に降らせるからである。(イザヤ書26の19)

⑤見よ、私はあなたの方の中に霊を吹き込む。そうすれば、あなた方は生き返る。…霊よ、四方から吹き来れ。これらの殺されたものの上に吹きつけよ、そうすれば、彼らは生き返る。(エゼキエル書37の5〜10より)

⑥その時まで、苦難が続く、国が始まって以来、かつてなかったほどの苦難が。しかし、その時には救われるであろう、お前の民、あの書に記された人々は。

多くの者が地の塵の中の眠りから目覚める。ある者は永遠

の生命に入り、ある者は永久に続く恥と憎悪の的となる。

目覚めた人々は大空の光りのように輝き、多くの者の救いとなった人々はとこしえに星と輝く。(ダニエル書12の1〜3)

⑦…拷問にかけられて息を引き取るまぎわに、彼は言った。

「邪悪な者よ、あなたはこの世から我々の命を消し去ろうとしているが、世界の王(神)

は、律法を守ったがゆえに死ぬ我々を、永遠の新しい命へとよみがえらせてくださるのだ。」(旧約聖書続編 マカバイ記II 7の9。マカバイ書とはキリスト以前の170年ころにアンテيوخス・エピファネス四世の激しい迫害にあった時代に書かれた書。旧約聖書続編(アポクリファ)とは、旧約から新約の時代に至る四百年ほど期間の歴史を知るためには不可欠の書。)

このように、復活に関して旧約聖書の最初の創世記、出エジプト記、申命記等々には、記述がみられないが、後の書物には神からのより深い啓示がなされ、死にうち勝つ力が示されていく。

こうした経過を通してキリストの時代となった。

キリストは復活に関してどのように言われただろうか。

ある重い犯罪人が、イエスとともに並んで十字架で処刑されるとき、イエスの復活を信じて、殺されても神の国に行くことを信じていた。そして、その罪人は、私を思い出してください、とイエスに願った。ただそれだけで主イエスは、あなたは今日、パラダイスにいる、と言われた。

…十字架にかけられていた犯罪人の一人が、イエスをののしった。

「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。」

21すると、もう一人の方がたしなめた。「お前は神をも恐れぬのか、同じ刑罰を受けているのに。」

我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。」

そして、「イエスよ、あなたの御国においてになるときは、わたしを思い出してください」と言った。

するとイエスは、「私は真実を言う。あなたは今日わたしと一緒にパラダイス(樂園)にいる」(*)と言われた。

(ルカ23の43)

(*) パラダイス という原語(paradise)は、新約聖書で右の箇所以外には、あと2回あらわれる。

・私は、パラダイスに引き上げられて、人間には語ることが許されていない、口に出すことのできないことを聞いたことを知っている。(Ⅱコリント12の4)

・勝利を得る者には、神のパラダイスにあるいのちの木の実を食べるこ

とをゆるそう』。(黙示録2の7より)

パウロは、パラダイスに引き上げられたというのは、彼が特別に靈的に引き上げられ、第三の天に引き上げられたことを言い換えたものである。

そこでは言葉では表現できない深い靈的な言葉を聞いたという。

また、黙示録の箇所は、この世にて靈的な勝利を与えられた者が導かれる完全な場所を意味している。

いずれにしても、パラダイスにイエスとともにいる、と約束されたのは、パウロがロマ書で述べたように、死後もキリストとともにいることを示すものである。

そしてこうした箇所も、十字架の重い犯罪人が処刑されてそのまま無になつてしまったのでなく、イエスとともに靈的な高い場所に導かれたことを意味している。

さらに、イエスご自身、体を殺しても、魂は生きていることを次のように言われた。

：体を殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。

むしろ、魂も体も地獄で滅ぼすことのできる方を恐れなさい。(マタイ10の28)

また、黙示録にも次のように記されている。

：小羊が第五の封印を開いたとき、神の言葉と自分たちがたてた証しのために殺された人々の魂を、わたしは祭壇の下に見た。(黙示録6の9)

「肉体と魂の二元論はギリシャ哲学の思想であつて、キリスト教とは違う」と言われたりするが、聖書はどのような単純な図式では説明できない広がりや奥行きを持った書である。

・また、主イエスご自身、殺されて三日目に復活し、40日は地上で語られ、その後天に引き上げられたとある。そしてステパノが見たように、天において神とキリストがともにおられるのを見た。

キリストは、復活したことを、目で見えるかたちで表すために、一時的に体においても復活された。しかし、それは一時的であつて、その後は、天(靈の世界)において神とともにおられる。

さらに、復活に関しては、イエスの深い靈的洞察によつて、旧約聖書の預言書たちにも啓示されていなかったことを初めて示された。それは、アブラハムやイサク、ヤコブといった旧約聖書の信仰者たちについて、死んで葬られた、先祖の列に加えられた、といった単純な記述のみで、死後どうなった、どんなところに行つたという説明などはみられない。死後の世界は、シェオー

ル(ヘブル語)と言われて光なきところといった漠然とした記述にとどまっている。

しかし、イエスは、次のように、アブラハムやイサク、ヤコブたちが死んで、生きていないのなら、神がモーセに対して、『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』というように言われることはないと教えられた。

：死者の復活については、神があなたたちに言われた言葉を讀んだことがないのか。

『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあるではないか。神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。」(マタイ22の31〜32)

律法学者たちは、モーセ律法には、死者の復活などどこにも書いてないとして、死者の

復活を否定していた。そのようなユダヤ人たちに対して、主イエスは誰も考えたことのない独自の内容を神からの啓示によって語られたのである。もし、アブラハムやイサク、ヤコブたちがまったく死んで無になっっているのなら、神がアブラハムの神—ということはありません。それは、神は、石ころの神、鉄の塊の神：などというように無意味である。アブラハムやイサクなどが神のうちにあって生きているからこそ、神はこのような表現をされたのである。

このように、イエスは、アブラハムやイサクなどが神との結びつきのなかで生きている—とイエスは言われた。この記述は、マルコ、マタイ、ルカの三つの福音書にすべて記されていることからみても、とくに重要とされていたのがうかがえる。

—このように過去に死んだと思

われていた人が、じつは生きている—ということについて、主イエスは、誰も考えたことのない視点で答えられた。それは神と完全な結びつきを与えられていて、主イエスが語ること、なすことはすべて神から言われるままになす、といわれたことからわかるが、神の究極的真理が啓示されていた御方であつたからである。神と結びついて生きた人は、死んで無になつてしまうことはなく、いまでも生きているのだということである。

このことに関連して、エリヤやモーセといった重要な人物もまた、死んで無になつていったとか無意識の状態になつていたのでなく、主にあつて生きているのを示しているのが次の箇所である。

：六日の後、イエスは、ペトロ、それにヤコブとその兄弟ヨハネだけを連れて、高い山

に登られた。イエスの姿が彼らの目の前で変わり、顔は太陽のように輝き、服は光のように白くなった。

見ると、モーセとエリヤが現れ、イエスと語り合っていた。(マタイ17の1〜3)

モーセとエリヤはすではるか昔に死んだ人である。しかし、その存在は無になつて消えてしまつていて、あるいは、全く死んで何の反応もないままの状態でなく、靈的に著しく高く引き上げられたイエスと語り合つていたというほどに、天使のごとき存在となつて生きていることを示している。

パウロ書簡においても、次のように、死後すぐにキリストと共にいることを示す箇所がある。

：私の願いはこの世を去ってキリストと共にいることであり、実はその方がはるかに望ましい。しかし、肉体にとどまっていることはあなたの方のためにさらには必要である。

(フィリピ書1の23〜24より)

ここでは、この世を去る―死んでキリストと共にいる、ということがごく自然に語られている。死んで世の終わりまで無の状態である―ということとはこの文面からは考えられない。

さらに、パウロの主著たるローマの信徒への手紙のクライマックスといわれる箇所には次のような内容が記されている。

：わたしは確信しています。

死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリ

スト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできない。

(ローマの信徒への手紙8の38〜39)

この世に存在するさまざまな力を述べるさい、最初に死の力をあげたうえで、現在、未来にわたっていかなる権力や暴力、あるいは災害等々も、キリストによって示された神の愛から引き離すことはできない、神の愛、キリストの愛の計り知れない強固さを示したのがこの箇所である。

死によって、神とキリストの愛から引き離されることはない―これは、死んでも神(キリスト)の愛のうちにあるということである。そして活ける神の本質たるその愛と固く結ばれている魂が、無の状態であるということは考えられない。

ヨハネによる福音書においては、私を信じるものは、死ん

でも死なない。と生死の断絶は克服されたと言われている。

このことは、死んだら、まったく無の状態になり、最後の審判のときにラッパの音とともに初めて復活する―ということとは大きく異なっている。

：はっきり言うておく。(*)

わたしの言葉を聞いて、わたしをお遣わしになった方を信じる者は、永遠の命を得、また、裁かれることなく、死から命へと移っている。

はつきり言うておく。死んだ者が神の子の声を聞く時が来る。今やその時である。その声を聞いた者は生きる。(ヨハネ5の24〜25)

(*) 新共同訳だけが、「はっきり言うておく」と訳しているが、原文は、「アーメン、アーメンレゴーヒューミン」である。アーメンとは、真実、真理を意味するので、英訳はほとんど「真理、真実に」という意味で訳している。 In all truth I tell you, (New Jerusalem Bible)

I tell you the truth (New International Version)

なお、独仏他の外国語訳もほぼ同様で、「真実に」という訳語を用いているか、原語のamenをそのまま用いている。・文語訳、新改訳は原文の意味を汲んで「まことに、まことに」と訳している。

「はつきり」というのは、曖昧というのと逆で、明瞭性をあらわし、子供が口をもぐもぐさせて答えようとする、とはつきり言いなさい、というのであって、真実とか真理とかとは本来関わりのない言葉である。主イエスが繰り返し用いているこのアーメンは、真実を含めて、真理を語られたのであって、単にはつきりと言ったのではない。

ここでは、主イエスは、イエスの言葉を聞いて信じるだけで、永遠の命が与えられること、すでに死から命へと移されていることを真理として強調されたのがわかる。霊的に死んだ状態の者であっても、キリストの声を聞いて信じるだけで、生きる、というのである。

このことにさらに念を押すように、繰り返し強調して表現を変えて述べているのが次の

箇所である。

：イエスが、「あなたの兄弟は復活する」と言われると、マルタは、「終わりの日の復活の時に復活することは存じております」と言った。

イエスは言われた。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。

生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」(ヨハネ11の23〜26)

ここでは、マルタが、当時の人たちの信仰―すなわち、世の終わりに復活するということは知っていると言っているが、イエスはそれを訂正して、終りの日になって初めて復活するのでなく、今イエスを神の子であり、神と等しい御方であると信じるだけで、死んでも生きる、決して死ぬこと

はない、と二重に述べて強調された。

そしてイエスは、このことを信じるか―とマルタに問いかけた。マルタはただちに、信じますと答えている。

これは、死からの復活について、キリストによる新しい時代を明確に示す箇所である。

人間が死んで、肉体は大地や空中等々に飛散して消滅し、さらに霊的なものも死んだ状態となってしまう―そして世の終わりに初めて復活する―このような信仰とは異なるゆえに、キリストも「このことを信じるか」と問われたし、現代の私たちにも向けられている問いかけである。

生きているときに、キリストを信じるだけで、私たちは永遠の命が与えられ、死の力から解き放たれる。

そのことの重要性ゆえに、ヨハネ福音書では、その最後の部分に総結論として次のよう

に記されている。

：これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。(ヨハネ20の31)

ここで、命とは、永遠の命のことであり、それは神の命を言い換えたものである。

そして神がもっておられる命とは、あらゆる力―愛や真実、清らかさ、英知、永遠性等々、いっさいのよきものを兼ね備えた命である。

そのことは、パウロ書簡においても次のように記されている。

：キリストは、万物を支配下に置くことさえできる力によって、わたしたちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださる。

(フィリピ書3の21)

キリストの栄光のからだ―それは、ヨハネが述べている永遠の命を与えられた体を意味している。

このように、私たちは、死んだらどうなるのか、ということについて、これらの聖書の箇所によって、キリストを信じるだけで、すでに地上において永遠の命を与えられ、死の力から解き放たれたものとされるゆえ、死後もそのキリストの命にあふれたものとされ、「キリストと共にいる」(フィリピ書1の23)のだと、信じることができる。

編集だより

○種まきのこと

「種まきとその祝福」の短文を読ませていただきました。表紙の大分県の秋月様が描か

れた「種まきの絵」もあらためて見なおしました。

「種とは福音であり、聖書の言葉でありそれらを生み出されたキリストである。」とありましたが、私には、いつでもどこで神様が種をまいて育ててくださるのかわかりませんが、落ち着いて自分の足跡を振り返ってみると、そのことが分かります。

私が中学生のころ、ある夜、同じ市内に住む父の先輩のクリスチャンが、わが家へ来られて、種まきの話をされました。種まきをして様々な場所に落ちた種が、枯れてしまったり、いろいろな育ち方があったり、あたり前の事であるので、何が重要なかさっぱりわかりませんでした。

しかし「種まきの話し」そのものと話された人の優しいまなざし、人柄の印象は非常に鮮明に覚えております。その後年を重ねて大人になり、中

学生の時に受けた最初の種まきが単なる偶然ではなく、神様がその方を通して蒔かれたのだとはっきりとわかるようになりました。

「種まきは、誰でも可能」である。「私たちの毎日が種まき」となるーとのことばを信じて、迷うことなく大胆に証しして行きたいと思います。(中部地方の方)

お知らせ

例年のように、今年も私(吉村(孝))は、7月に北海道の瀬棚聖書集會にて御言葉を語る予定です。その後、主の許しがありましたら、次のような予定で各地の集會にて御言葉を語らせていただくことになっていきますので、関心のある方は、ご参加ください。

○7月11日(火) 舞鶴市西方寺での集會。連絡先 添田

潤 電話 0773-83-0230

○7月13日(木) 夜16日(日) 13時 北海道瀬棚聖書集會(5月号に詳細)

○7月17日(月) 札幌交流会
連絡先 大塚 電話011-598-6383

・会場 かでる2・7(道民活動センタービル) 310
会議室

札幌市中央区北2条西7丁目
電話番号: 011-204-510

○7月19日(水)
苫小牧集會 大澤宅 10時〜苫小牧市若草町4の2の21
パレス王子第2の904
電話0144-33-6626

○7月20日(木) 青森県での集會。弘前市城西5-11-8
対馬 秀夫宅。13時〜15時。

連絡先0172-36-9605
(なお、「いのちの水」誌印刷版

では、会場は、日本キリスト教団青森戸山教会となっていました。

その後、弘前市の教友である対馬秀夫氏から連絡があり、自宅「弘前聖書の集い」を始めたとのこと、今回はこちらでの集會を希望されました。そして、戸山教会での開催を準備してくださった岩谷さんも同意されていて、対馬氏宅での集會となりました。

○7月22日(土) 午前10時〜12時。佐藤宅での集會。山形県鶴岡市大西町5-16
連絡先 0235-22-4856

○7月22日(土) 山形集會
18:00〜20:30
大手門パルズでの集會
023-624-8600

山形県山形市木の実町1
2-37

連絡先 白崎 良一 電話023-625-4113

○7月23日(日) AM:10:00
仙台での集會。戦災復興記

念館

仙台市青葉区大町2-12-1

1 電話 022-263-6931

4階 第一会議室 10時から

12時 連絡先 022-394-6128

(田嶋 誠)

○7月24日(月) AM10:30~12

00 福島県での集会。湯浅鉄
郎宅。連絡先 電話

○7月25日(火) 大網集会

足立宅 (2時~4時) 千葉

県大網白里市大網872-2

連絡先 0475-52-0273 (深山

政治)

○7月25日(火) 市川市での

集会 土屋 聡宅。午後6時~

千葉県市原市桜台1-11-1

2 連絡先 0436-66-5593

○7月26日(水) 午前10時~

14時。午後は交流会。

東京都府中市での集会 府

中グリーンプラザ 電話 042-

360-3311 連絡先 042-625-

0178 (永井)

○7月27日(木) 山梨県 午

前10時~13時 南アルプス集

会 山口 清三宅 北杜市長坂

町大八田 604-1 電話

0551-32-0026

連絡先 0552-28-2750 (加茂

悦爾)

○7月27日(木) 関 聡宅での

集会。長野県千曲市鋳物師屋

62-3

午後3時~5時 電話。026-

274-3131

○7月28日(金) 有賀宅集会

10時~12時。伊那市西箕輪羽

広 3088-1

連絡先 0265-76-6646

これらの集会において、少し
でも、神の言葉が語られ、聖
なる霊がはたらきますように
と、ご加禱くだされば幸いで
す。

徳島聖書キリスト集会案内

・場所は、徳島市南田宮一丁目一の47
徳島市バス東田宮下車徒歩四分。

(一) 主日礼拝 毎日曜午前10時30分~

(二) 夕拝 第一火曜と第三火曜。夜7

時30分から。毎月第四火曜日の夕拝は

移動夕拝。(場所は、徳島市国府町の

ちのさと作業所、吉野川市鴨島町の中川

宅、板野郡藍住町の奥住宅、徳島市城南

町の熊井宅の4箇所を毎月場所を変えて

開催)です。

・水曜集会：第二水曜日午後一時から集

会場にて。・北島集会：板野郡北島町の

戸川宅(第2、第4月曜日午後一時より。

北島夕拝は第二水曜日夜七時三十分より)

・天竺堂集会：徳島市応神町の天竺堂

はり治療院(網野宅)、毎月第2金曜日

午後8時。

・海陽集会、海部郡海陽町の讃美堂・数

度宅 第二火曜日午前10時より)、

・いのちのさと集会：徳島市国府町(毎

月第一木曜日午後七時三十分より「いの

ちのさと」作業所)、・藍住集会：第二

月曜日の午前10時より板野郡藍住町の美

容サロン・ルカ(笠原宅)、・小羊集会

：徳島市南島田町の鈴木ハリ治療院にて。

毎月第一月曜午後1時。・つゆ草集会

：毎月第4日曜日午後一時半。・徳島大

学病院8階個室での集まり。・第四土曜

日の午後二時からの手話と植物、聖書の

会、問い合わせは左記。



著者・発行人 吉村孝雄 〒777-0101 小松島市中田町字西山九一の四 電話・FAX 0885-32-3017 「いのちの水」協力費 一年 五百円(但し負担随意)

郵便振替口座 〇一六三〇一五―五五九〇四 加入者名 徳島聖書キリスト集会 協力費は、郵便振替口座か定額小為替、または普通為替で編集者あてに送って下さい。

(これらは、いずれも郵便局で扱っています。) E-mail: pistis7ty12@hotmail.com http://pistis.jp (検索は「徳島聖書キリスト集会」)